

東金市・外荒遺跡発掘調査報告書

—国道409号交通安全対策事業に伴う埋蔵文化財調査—

1988

千葉県土木部
財団法人 千葉県文化財センター

東金市・外荒遺跡発掘調査報告書

— 国道409号交通安全対策事業に伴う埋蔵文化財調査 —

1 9 8 8

千葉県土木部
財団法人 千葉県文化財センター

序 文

東京湾岸地域と内陸部を結ぶ国道409号は、当該地域の発展とともに交通量が増加しており、沿線市町村地域での交通安全対策が必要となっています。

このたび、東金市淹地区において交通安全対策事業として歩道の建設を実施することになりましたが、この地域は、先土器時代から現代に至るまでの歴史的文化遺産が数多く遺存しているため、千葉県土木部道路建設課は教育庁文化課と、その取り扱いについて度重なる協議を行ってきました。

その結果、発掘調査を実施し記録保存の措置を講じることとなり、千葉県教育委員会の指名により財団法人千葉県文化財センターが実施することになりました。発掘調査は、昭和61年6月に実施し、奈良・平安時代の住居跡や近世以降の炭窯が発見され、当地域の歴史や文化を解明する一つの資料を得ることができました。

そしてここに、発掘調査の成果を整理し報告書を刊行する運びとなりました。本報告書が、歴史・文化の研究に、あるいは文化財保護思想の啓蒙と普及に役立てば幸いと存じます。

終りに、発掘調査から報告書刊行に至るまで御指導、御協力をいただいた教育庁文化課、土木部道路建設課、山武土木事務所、東金市教育委員会、山武郡南部地区文化財センターの関係諸機関及び現場調査・整理作業に尽力された調査補助員の皆様に厚く御礼申し上げます。

昭和63年3月

財団法人千葉県文化財センター

理事長 山 本 孝 也

凡　　例

1. 本報告書は、千葉県東金市滝字中谷471他に位置する外荒遺跡の発掘調査報告書である。遺跡コードは、213-002である。
2. この調査は、国道409号交通安全対策事業に伴う事前調査として、千葉県教育委員会の指導のもとに、千葉県土木部との委託契約に基き財団法人千葉県文化財センターが実施した。
3. 発掘調査は、下記の担当により昭和61年6月1日から6月30日まで実施した。
調査部長 鈴木道之助、部長補佐 岡川宏道、班長 高橋賢一、主任調査研究員 川島利道。
整理作業は、昭和62年8月1日から8月31日まで、調査部長 堀部昭夫、部長補佐 古内茂の指導、助言のもとに班長、矢戸三男が実施した。
4. 発掘調査から整理作業、報告書刊行に至るまで下記の諸機関、諸氏の御指導・御協力を賜った。ここに記して感謝の意を表したい。
千葉県教育庁文化課、千葉県土木部道路建設課、千葉県山武土木事務所、東金警察署、東金市教育委員会、鎌山武郡市南部地区文化財センター、地元滝地区並に調査補助員の皆様。
5. 本書に使用した地形図(1:25,000)は、国土地理院著作発行の「八街」「東金」を使用した。
6. 本書の挿図中の北方位は、公共座標北を示している。

目 次

本文目次

序 文

凡 例

1) 外荒遺跡の環境.....	1
2) 調査に至る経緯と経過.....	5
3) 調査概要.....	5
4) 遺構と遺物.....	8
5)まとめ.....	10

挿図目次

第一図 外荒遺跡と周辺遺跡.....	2
第二図 外荒遺跡全体図.....	3・4
第三図 調査区全体図及び層序.....	6
第四図 遺構平面図・断面図.....	7
第五図 遺物実測図.....	11

図版目次

図版 1 遺跡近景	
図版 2 住居跡及び炭窯断面	
図版 3 炭窯及び土層	
図版 4 遺 物	

1) 外荒遺跡の環境

(1) 地理的環境

外荒遺跡は、東金市の北西約4.2kmの台地上に位置する。この地域は、南に九十九里低地を眺み太平洋に至るもので所謂太平洋岸地域に属し、この地域の台地は太平洋側から入り込む谷によって複雑に開析され樹枝状に分岐している。また、台地は概して南側斜面が急勾配となり、北側斜面は南側に比べて緩かである。

外荒遺跡の所在する台地は、略北東側から南西側に向って延びるものであるが、国道409号が二分するように横断している。国道の北東側部分は、中央付近で標高66.7mを測り台地の最高位を呈する。谷面との比高差は、約21mを測る。国道の南西側は、標高64～62mとやや起伏があるものの概ね平坦面を呈する。谷面との比高差は、約40mを測る。

今回調査した地点は、国道の北東側部分であり、台地北西側から中央部にかけての細長い部分である。標高は、64～61mを測り緩やかな起伏が認められるが、北西側に浅い谷が入り込んでおり全体としてはその方向に傾斜する。

(2) 歴史的環境

外荒遺跡においては、量としては少いものの縄文土器・土師器・須恵器及び近世～現代の陶磁器・瓦等が出土している。また、検出された遺構には、住居跡・炭窯がある。このうち、住居跡や土師器・須恵器は、奈良時代～平安時代のものと思われ、本遺跡の主体はこの時代にあるものと考えられる。

本遺跡周辺には、先土器時代～中世・近世及び現代に至るまでの遺跡が非常に多く分布している。中でも、土師器・須恵器を出土する遺跡数の多いことは注目される。時期の判明している遺跡では奈良・平安時代の遺跡が多いようである。発掘調査が実施された③作畠遺跡では大規模な集落跡であることが判明しており、外荒遺跡の南西側約3kmの位置に所在する山田水呑遺跡や大網山田台遺跡群等の調査成果からすれば遺構密度は高く、竪穴住居跡の他掘立柱建物跡・寺院跡と考えられる遺構等が検出されており、奈良・平安時代においてはこの周辺は主要な地域であったことが窺え、近年の発掘調査によって徐々に当該時代の様相が明らかにされつつある。

参考文献

「千葉県埋蔵文化財分布地図(3)」昭和61年3月 健千葉県文化財センター

「房總における歴史時代土器の研究」昭和62年1月 房總歴史考古学研究会

「山田水呑遺跡」昭和52年5月 山田遺跡調査会

「財團法人山武郡南部地区文化財センター年報No.1」昭和61年3月 財團法人山武郡南部地



番号	遺跡名	市町村・遺跡番号	遺構・遺物
1	外荒遺跡	213-No78	土師器
2	澁木浦 I・II 遺跡	213-No79・80	住居跡・土師器(真間)
3	作畠遺跡	213-No81	土師器・須恵器
4	油井古墳原遺跡	213-No86・87	古墳群・土師器
5	澁東台遺跡	213-No83	绳文土器・土師器
6	牛ヶ塙遺跡	213-No116	绳文土器・土師器
7	前畠遺跡	213-No117	土師器・古瓦
8	小野遺跡	213-No154	绳文土器・土師器・須恵器
9	楽ヶ谷 I・II 遺跡	323-No112-113	土師器
10	タカラド遺跡	323-No110	土師器

(注) 文町村コードの213は東金市を、323は八街町を示す。遺跡Noは各市町村内での通し番号である。

第1図 外荒遺跡と周辺遺跡



第2図 外荒遺跡全体図

区センター

「財團法人山武郡南部地区文化財センター年報No.2」昭和62年3月 財團法人山武郡南部地区センター

2) 調査に至る経緯と経過

東京湾岸から太平洋岸地域をかすめ内陸を結ぶ国道409号は、沿線地域の発展とともに交通量が増加しており、交通安全対策が急がれているところでもあった。このため、交通安全対策の一つとして歩道建設が実施されることとなり、既に着手されている部分もある。

このたび、東金市滝地区において歩道建設が実施されることとなり工事が開始されたが、工事途中において奈良・平安時代の住居跡が発見された。この地点は、外荒遺跡の所在する台地であり、この他にも遺構が存在することが考えられたため、急拠発掘調査を実施することとなったものである。

発掘調査は、昭和61年6月1日から6月30日の一ヶ月の工程で実施した。調査対象地は、今後工事に着手する地区と既に工事によって削平された地区についてであり、面積は400m²である。

3) 調査概要

(1) 調査の方法

発掘調査は、既に工事によって削平され遺構断面の露呈している地区とこれから工事が予定されている地区について実施した。

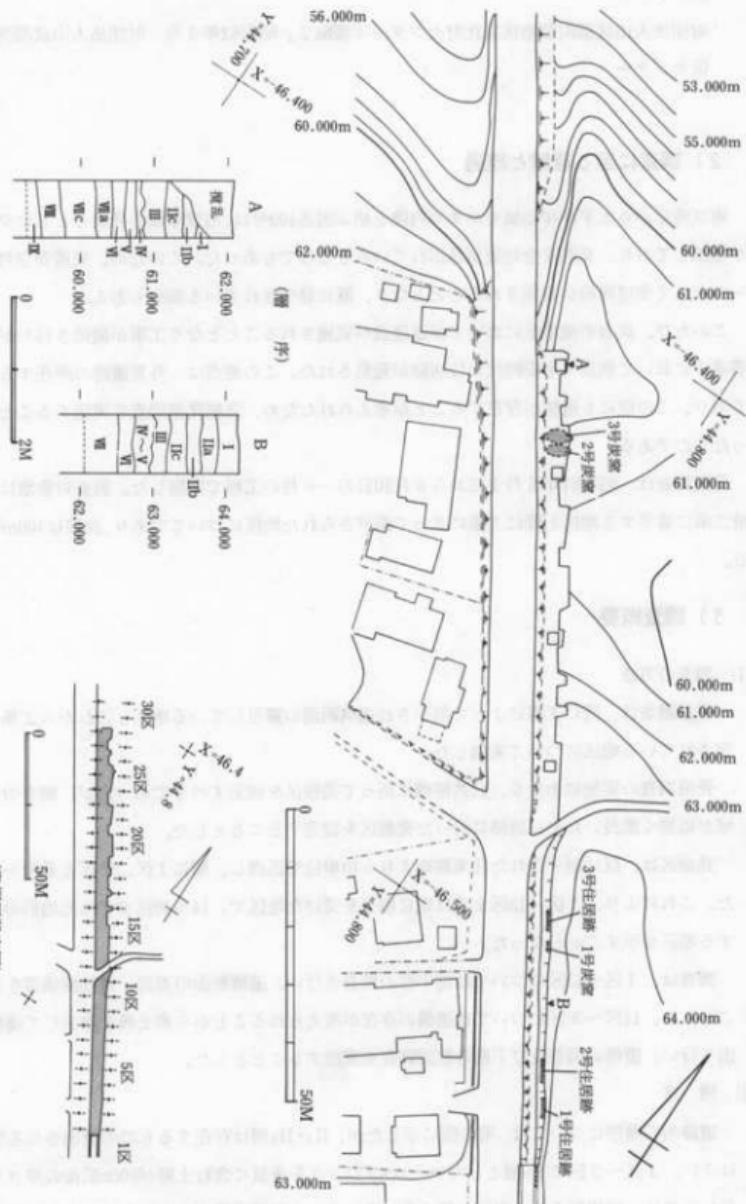
発掘調査の実施にあたり、公共座標に沿って発掘区を設定すべきであったが、調査対象区域が幅狭く細長いため、道路に沿った発掘区を設定することとした。

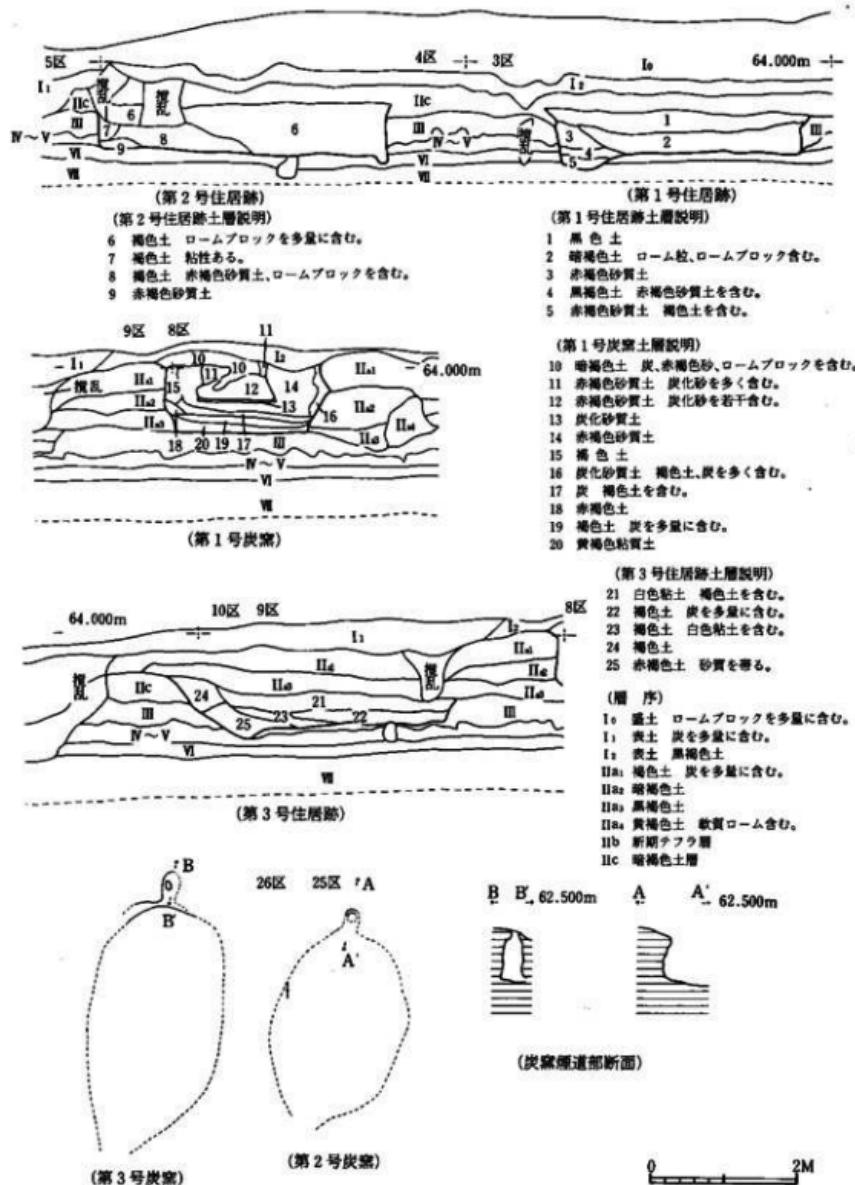
発掘区は、既に削平された北東側端より5m単位で区画し、順に1区、2区と番号を付した。これにより、1区～13区までは既に削平を受けた地区で、14～30区までは元地形の遺存する地区を示すこととなった。

調査は、1区～13区については削平面の精査を行い、遺構断面の実測・遺物採集等を行うこととし、14区～30区については遺構の存在が考えられることから表土層を除去して遺構検出を行い、遺構の調査及び下層の確認調査を実施することとした。

(2) 層序

遺跡内の層序については、第3図に示したが、II_a・II_b層は存在するものの検出される箇所は少い。1区～5区にI_a層としたローム・ブロックを多量に含む土層が80cm前後の厚さで存在しており、周辺部よりも約50cm高くなっている。この層は盛土されたものではあるが、層





第4図 造構平面図・断面図

の表面は表土化が進んでおらず比較的新しい時期のものであろう。

第一号炭窯周辺の土層は自然層とはやや異なるようであり、II₁層から瓦破片が、II₂層からは陶器片が出土しており近・現代の層と思われ、炭窯構築に伴う掘方埋土と考えられる。

I₁層は、多量の炭を含む点から第1号炭窯に関連する土層が表土化したものと思われる。

III層は軟質ローム層であり、VI層はA・Tを含む。VII層は第II暗色帶であり、a・bの二層に区分できる。

4) 遺構と遺物

(1) 遺構

今回の調査によって検出された遺構は、住居跡3・炭窯3である。このうち、炭窯2基を除いては、全て工事によって削平されており断面を検出したにすぎない。

先土器時代の遺構・遺物については、確認調査の結果何も検出されなかった。

第1号住居跡（第4図）

遺構掘込み面は、明瞭ではないがII₂層付近で確認できる。覆土は、上層に黒色土、下層に暗褐色土が堆積する。北西側の壁際には赤褐色砂質土や焼土を含む砂質土層が堆積しており、この部分の床面もやや窪んでいるところからカマドの部分かと思われる。

削平による切削面が遺構のどの部位を通っているのか定かではないが、現状での長さ3.32m、深さ57~81cmを測る。床は北西側が約20cm落込むが、その他の部分は緩やかな凸凹があるもののほぼ平坦である。壁溝は認められない。壁は、ほぼ垂直に掘り込まれている。

遺物は、北西側底面或いは覆土下層から若干の土師器小破片が出土したが図示できるものはない。

第2号住居跡（第4図）

第1号住居跡の北西側約2.2mに位置する。遺構の掘込みは、II₂層付近で確認できる。覆土は、中央から南東側にローム・ブロックを多量に含む褐色土が床面～確認面まで単層で堆積しており、人為的な埋土が考えられる。北西側では下層に砂質土層が、壁際では赤褐色砂質土層が堆積しておりカマド構築材の流出と思われる。

本跡もまた、削平切削が遺構のどの部分を通っているか定かではない。現状での長さは3.83cm、深さ61~71cmを測る。床面はやや南東側へ傾斜している。南東側壁直下には壁溝が存在し、幅17cm、深さ11cmで断面は「U」字形を呈する。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。

遺物は、北西側壁付近から出土しており、土師器・壺、甕或いは土製支脚がある。甕は小破片であり図示できなかった。

第3号住居跡（第4図）

第2号住居跡の北西側約21.3mにあって、前2者よりやや離れて位置する。遺構掘込みはIIc層付近で確認できる。覆土は、上層に白色粘土を主体とする土層が堆積し、下層には中央から南東側にかけて炭を多量に含む褐色土が、北西側には白色粘土を含む褐色土、砂質な赤褐色土層が堆積している。人為的埋土が考えられる。

本跡も削平切断面が遺構のどの部分を通っているか定かではない。現状での長さ3.99m(下端3.05m)、深さ30~68cmを測る。床面はやや凸凹が目立つ、中央部から北西側へ緩やかに傾斜し、壁際がさらに15cmほど窪む。壁は外方に向って傾斜しており、北西側は著しい。

遺物は、何も検出されなかった。

第1号炭窯(第4図)

第2号住居跡と第3号住居跡の間にあって、第3号住居跡の南東側約1.3mの距離に位置する。遺構確認面はI層下である。削平切断面が遺構のどの部分を通っているか定かではない。現状での幅1.04m、高さは天井部が崩落しており約53cmを測る。炭窯掘り方は幅1.79~2.23cm、深さ約94cmを測る。掘方埋土は、最下部に黄褐色粘質土を敷き、底面から約30cmまでは水平に埋土し、これより上部は縦方向の埋土をし、最終的には砂質土で底・壁を構築する方法を用いている。

遺構内及び掘り方埋土中からは、何の遺物も出土しなかった。

第2号炭窯(第4図)

北西側調査区域内にあって、第1号炭窯とは約84m離れて位置し、第3号炭窯と近接している。遺構は、表土除去の段階で既に床面しか遺存せず、僅少に北東側で煙道部の一部が遺存していたにすぎない。

床面から推測すれば、長軸約3m、短軸約1.8mの橢円形を呈するものと考えられる。長軸は北東~南北方向を示す。煙道部は径約20cm前後で、残存高約65cmを測る。遺物は、何も出土しなかった。

第3号炭窯(第4図)

第2号炭窯と近接し並列するように位置している。遺構は、表土除去の段階で床面しか遺存しておらず、僅少に北東側で煙道部の一部が遺存していたにすぎない。

床面から推測すれば、長軸約3.9m、短軸約1.9mの橢円形を呈するものと考えられる。長軸は、北東~南北方向を示す。煙道部は、径約20cm前後を測り、残存高は約70cmを測る。遺物は、何も出土しなかった。

(2) 遺物

検出された遺構のうち、住居跡から土師器・須恵器及び土製支脚の破片が出土している。また、設定した調査区内からも、縄文土器・土師器・陶磁器の破片、瓦・砥石の破片等が出土している。しかし、いずれも小破片が多く、図示し得たのは第2号住居跡出土遺物と第5

区出土遺物にすぎない。

第2号住居跡出土遺物（第5図）

1. 土師器・壺形土器である。遺存度は約 $\frac{1}{2}$ 程度であるが、口縁部から底部までが遺存している。推定口径約14.1cm、器高6.8cm、推定底径6.0cmを測る。器形は、底部と体部との境が丸味をもって移行するものであり、体部は若干内湾しつつ外方に開きながら立ち上る。口縁部は、僅少に内傾或いは直立し、口唇部付近は若干外反する。

調整については、内外面とも器面の磨耗が著しくその痕跡がはっきりしないが、外面では、口縁部は横ナデ、体部は横位～斜位のヘラ削り、底面はヘラ削りが施されていたもの思われる。内面は、全体にナデ若しくはヘラ磨きが施されていたものと思われる。

色調は、7.5YR— $\frac{1}{4}$ で橙色に近い色調を呈する。胎土中には、赤褐色を呈する粒子を少し含むが全体としては密である。焼成はやや軟質である。

2. 土製支脚である。頭部の一部と下方部を欠損する。現存長約14.6cm、径5.5cmを測る。円柱状を呈するが、頭部は若干つぼまり、下方部は少し径が増すようである。頭頂部は平坦ではなく、少し痩んでいる。調整は、全体にナデが施されている。胎土は、砂粒をやや多く含むが比較的良好なものである。色調は褐色を呈す。焼成は、欠損部分がややもろくなっているものの他は良好である。

第5区出土遺物（第5図）

3. 繩文土器である。遺存度は、胴部下半から底部にかけてのもので約 $\frac{1}{2}$ 程度である。推定底径約6.7cm、現存器高4.2cmを測る。底部は平底を呈するが、体部との境が磨耗により丸味をおびている。体部は、僅少に外反ぎみに外方へ開きながら立ち上る。調整は、底部内面は、やや粗いヘラ磨きが施されるが中央付近には網代痕が一部認められる。体部は縦位のヘラ磨きが施される。底部内面は、横位のヘラ磨きが、体部は縦位～横位のヘラ磨きが施される。色調は、外面では底部が黒色を、体部は黄褐色を呈す。内面は、灰暗褐色を呈す。胎土中には砂粒を若干含むが比較的密である。焼成は堅く良好である。

5) ま と め

今回の調査において、住居跡3軒・炭窯3基を検出した。住居跡は、いずれも調査区の南東側に位置している。しかし、遺跡の所在する地形からみれば、調査区北西側に浅い小支谷が入り込んでいるためと考えられ、住居跡の存在する地点は台地ほぼ中央部付近であること考慮すれば、恐らく台地全体に広がっているものと思われる。

住居跡の年代については、第2号住居跡を除いては小破片の土師器、須恵器しか出土せず明確にはできないが、破片の観察からすれば大きな時期差はないものと思われる。

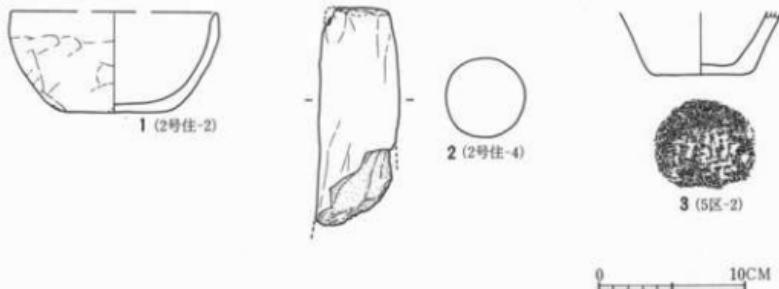
第2号住居跡からは、土師器・壺、土製支脚等が出土している。土師器・壺は、平底を有するものの体部との境が丸味をもち明確な稜をなさないもので、壺とするよりは壺形土器とすべきかもしれない。このような特徴を有する土器は、東金市・山田水呑遺跡における土器編年においてI群D類に比定されるものかと考えられる。しかしながら、本類の共伴関係は幅広く、8世紀前半～9世紀前半までの幅広い時期に亘ることが指摘されている（注1）。なお、地域は異なるが市原市・坊作遺跡における土器編年の中において、Pre坊作B期段階或いは坊作I-b期に似た形態をもつものがあり、これを参考にすれば8世紀前葉前後から8世紀後葉前後に位置付けられる（注2）。いずれにしてもやや幅があるが、概ね8世紀代の時期で捉えられるものと思われる。

第1号住居跡或いは発掘区出土の土師器・須恵器も明確ではないが、概ね第2号住居跡とはさほど時期的には隔りのないものと思われる。

炭窯について年代を決定付ける遺物は何も出土していないが、第2・3号炭窯はほぼ同時期乃至は近接した時期のものと思われ、第1号炭窯のような大きな掘り方をもたないものである。第1号炭窯は、しっかりした掘り方を有するが、付近の層から近・現代の瓦片・陶器片等が出土しており、この時期に構築されたものではないかと思われる。

注1.「山田水呑遺跡」昭和52年5月 山田遺跡調査会

注2.「房総における歴史時代の土器」 昭和62年1月 房総歴史考古学研究会



第5図 遺物実測図

写 真 図 版

遺跡近景
(1~13区付近)



遺跡近景
(14~30区付近)



調査状況
(14~30区付近)



住居跡断面
(第1・2号住居跡)



住居跡断面
(第1号住居跡)



住居跡・炭窯断面

〔第3号住居跡〕

〔第1号炭窯〕



第2号炭窯
(煙道部)



第3号炭窯
(煙道部)



土層断面
〔先土器時代
確認調査〕



第 2 号住居跡
(土 師 器)



第 2 号住居跡
(土製支脚)



第 5 区
(绳文土器)



東金市・外荒遺跡発掘調査報告書
— 国道408号交通安全対策事業に伴う埋蔵文化財調査 —

印 刷 昭和63年3月25日
発 行 昭和63年3月31日

発 行 千葉県土木部
千葉市市場町1-1
財団法人 千葉県文化財センター
千葉市葛城2-10-1 (0472)25-6478㈹
印 刷 株式会社 弘文社
市川市市川南2-7-2 (0473)24-5977㈹
